

■柴田是真 しばたぜしん ♫船狼藉	漆工家、絵師・日本画家。 日本の漆工分野において、近世から近代への橋渡しする役割を果たした。
1807＝	江戸両国で、柴田市五郎・ますの長男に生まれる。幼名は亀太郎。
伊能測量終・1816＝9歳： 杉田玄白没・1817＝10歳： 水野忠成老中1818＝11歳：	原羊遊斎と並び称された「蒔絵師古満寛哉」に入門。
群書類従完結1819＝13歳	寛哉は、華美な作風の羊遊斎に対し、職人氣質を重んじた精巧な細工を得意とした。
膝栗毛終・・・1822＝15歳	はじめて三組の蒔絵盃を依頼されて制作し、納める。 他人の下絵をあてにするのに限界を感じ、自ら下絵を描ける職人をめざし、 四条派の「画家鈴木南嶺」にも入門。二人の師の名の一部使って「令哉」と号し始める。
ｼｰﾎﾞﾙﾄ鳴滝塾1824＝17歳 異国船打払令1825＝18歳： ・・・1826＝19歳：	年の長で売出し中の浮世絵師歌川国芳が、是真の扇絵を見て感動、弟子入りを申し出て来たという。 この頃には、「蒔絵師としての修業を終え、独立して、自宅で仕事をする。
富簀流行・・・1830＝23歳： 富嶽三十六景1831＝24歳：	「絵の修業のため上洛し、南嶺の紹介で四条派の岡本豊彦」に入門。 東福寺塔頭三聖寺の什宝「釈迦十六羅漢図」の模写の機会を得、豊彦の代理か、妙心寺塔頭大雄院方丈襖絵のいくつかに「令哉」印がある。旺盛な知識欲を発揮、歌学を香川景樹に学び、彼の紹介で頼山陽を訪れ、茶、俳諧などを学んでいる。その後、長崎に遊学をめざして讃岐に渡る船中で熱病に倒れて京都に戻り、
天保大飢饉始1833＝26歳： 高島砲術・・・1834＝27歳： 滑稽+人情本1835＝28歳： ・・・1836＝29歳：	江戸へ帰る。画技の進歩を認めた師南嶺から「値然」という字と「是真」の号を与えられる。 この頃、浅草の神田川の河岸に転居、対岸の見事な柳の土堤に、「対柳居」と称し、以後好んで使用。 池田泰真が入門。 蒔絵研究のため、再び上洛。香川景樹の紹介で知合った奈良の歌人で有職故実家の穂井田忠友から、正倉院御物の漆器類を模写を見せて貰い、岡本豊彦からも乾漆像などの仏像研究を勧められるなどして、江戸に戻る。この年刊行の「広益諸家人名録」には画家として登録され、本業の蒔絵をしのぐ評判であった。
大塩平八郎乱1837＝30歳： 勲進帳初演・1840＝33歳：	＊江戸住吉明德講が王子稻荷神社に奉納する絵馬を依頼され、茨木童子の話に取材した「鬼女図」を制作、江戸市中の評判となって、画家是真の出世作となり、以後、同じ画題での多数の注文に変化をつけて描く。
順天堂始・・・1843＝36歳： 阿部正弘首座1845＝38歳： ・・・1848＝41歳：	幕府御用達商人松本兵四郎から、脇差の鞘に、元禄年間に塗師勘七が完成するも、廃れていた蒔絵技法の青海波塗を施すよう依頼があり、弟子池田泰真とともに、勘七の遺品について研究を重ね、 遂にこの技法を再興、他の器物にも応用して行く。
国定忠治疎・1850＝43歳	最初の妻すまとの婚姻の時期はわかっていないが、比較的晩年に結婚したらしく、
万次郎帰国・1852＝45歳： ペリー来航・1853＝46歳 開国開港・・・1854＝47歳	鎌倉鶴岡八幡宮の御神宝、十二手箱の修理を依頼され、弟子の池田泰真、松野応真とともに、短時日で完成させるなど、古器物修復にも定評を得ていたことが分かる。
安政大地震・1855＝48歳	細木香以編「狂歌本朝二十四孝」、竹堂丈雨編「七夕朗詠集」の挿絵を描く。
五ヶ国条約・1858＝51歳 桜田門外変・1860＝53歳： 遣欧使節・・・1861＝54歳： 8月18日政変1863＝56歳：	母が病死、看病疲れで妻まで死去。京都東福寺塔頭三聖寺の諸図十九幅の売却情報が入り、そのなかにかつて模写した「十六羅漢図」があつて、是非入手しようと、地所や書画骨董類を売払うものの金額は足りず、 歌子と再婚。不足分を神田の豪商辻又平兵衛に借りて入手。小石川伝通院で羅漢講式を修すると大評判、拝観希望者が日々増加、薩摩の島津侯から、木挽町狩野家を介して、さらに高額出すので譲ってほしいとの申し出るも固辞し、代わりに島津邸に仏画を抱えて高覧に供する。のちに自ら「一代の大困難」と述懐。 次男慎次郎(真哉)が誕生。
禁門の変・・・1864＝57歳	後妻歌子も死去。師の古満寛哉が所蔵していた「尾形光琳作といわれる「扇面業平蒔絵硯箱」を入手、執念を込めて、複製を制作、光琳の原本と寸分違わぬように見せかけている。
明治維新・・・1868＝61歳 戊辰戦争終・1869＝62歳 初の日刊新聞1870＝63歳：	両国の青物問屋の娘梅沢しのを迎えるが、なぜか入籍せず、 「画家としての名声を得、蒔絵師としても名匠として知られ、御神宝の修理依頼まで来る存在」となって、 明治を迎えると、 ＊早速、宮内省より、「緋色地桜花金蒔絵椅子」三十脚の注文を受ける。
学問のすすめ1872＝65歳	この前後、性格が正反対の河鍋曉斎が勝田五兵衛の娘が夭折した供養に描いた画帖を納める箱を制作、 鍋木清方の「こしかたの記」には、皇室からの御用命に、是真が光栄と思うどころか、自分は前公方様の御治世に人となったもので、朝廷方の御仕事をするのは気が済まない難色を示したという逸話があるが、
明治6年政変1873＝66歳： 佐賀の乱・1874＝67歳 三つの内乱1876＝69歳： 西南戦争・・・1877＝70歳：	命により、「明治天皇が使われる鞭の柄に菊花蒔絵を施し、次いで、浜離宮延徳館の壁画の花鳥図を描いている。この頃、塩田真に勧められて、蒔絵の技法を絵画に応用した独自の漆絵の開発に着手。 あいかわらず技法をとことん追求する頑固職人ぶりで、着衣は、家と外出時の冬と夏それぞれ1装束以外を着ることはほとんどなく、酒好きで多く呑むも酔うことなく謹厳であったという。 ウィーン万国博覧会に、技法全てを注ぎ込んだ大画面の「富士田子浦蒔絵額」出品し、進歩賞牌を受ける。
大久保暗殺・1878＝71歳 沖縄県編入・1879＝72歳： ・・・1880＝73歳 明治14年政変1881＝74歳：	第一回内国勲業博覧会に、蒔絵額「温室盆栽蒔絵額」「蕨燕図」「採草図」を(工芸でなく)第二類書画の部門に出品、絵画のように自在な描写力が評価されて、龍紋賞牌を受ける。 長女せいが誕生。「名古屋博覧会にも漆絵額面を出品し、銅賞牌。この年、剃髪する。 第一回内国絵画共進会には「爆布図」「洗馬図」を出品し、審査官にもなる。宮内省より「山水図」の揮毫命、 明宮御殿の襖二面に「反哺図」を描く。 河鍋曉斎と合作で「鯉の滝登り図」。 ＊皇后新宮殿の杉戸絵揮毫の画工にも選出されて傑作を描くなど、画家としての地位も最高潮に達し、「(東洋絵画会)の設立に当たっては特別会員となり、
新体詩抄・・・1882＝75歳 秩父事件・・・1884＝77歳 内閣発足・・・1885＝78歳	東京府工芸品共進会では審査員を命ぜられる。 「漆絵の大作「田家早春図」を描き、圧倒的マチエールをもった「立波海老蒔絵額面」を農商務省へ納入、臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛を委嘱される。パリ万国博覧会へ出品されて、最高賞の金賞牌を受賞。上野日本美術協会列品館で大規模な回顧展「是真翁絵画蒔絵展覧会」が開催され、皇后も臨御し恩賜金、
帝国議会始・1890＝83歳	第三回内国勲業博覧会で「立波海老蒔絵額面」が妙技一等賞牌となり、「時事新報社」による人気投票でも金牌を受け、帝室技芸員制度が設置されると同時に任命されるなど、まさに功成り名を遂げて、
足尾鉾毒始・1891＝84歳	＊漆工家の技術向上をめざす職能団体「日本漆工会」を、中心となって旗揚げしてまもなく、祖父・父・叔父の話を語り残したと口述筆記させ、それに満足して酒宴まで開き、没した。恩賜の銀盃が下された。
別冊太陽「柴田是真」,	